



七言文集

四十五



巖作山大悲閣之圖

山頭十景

妙音觀楊花
 芹澤村鳴蛙
 安積山晴靄
 高場丘螢火
 胡和瀧晚涼
 那珂嶺皎月
 錢城嶽餘雲
 大熊川奔流
 光明潭古柳
 矢給渡行客

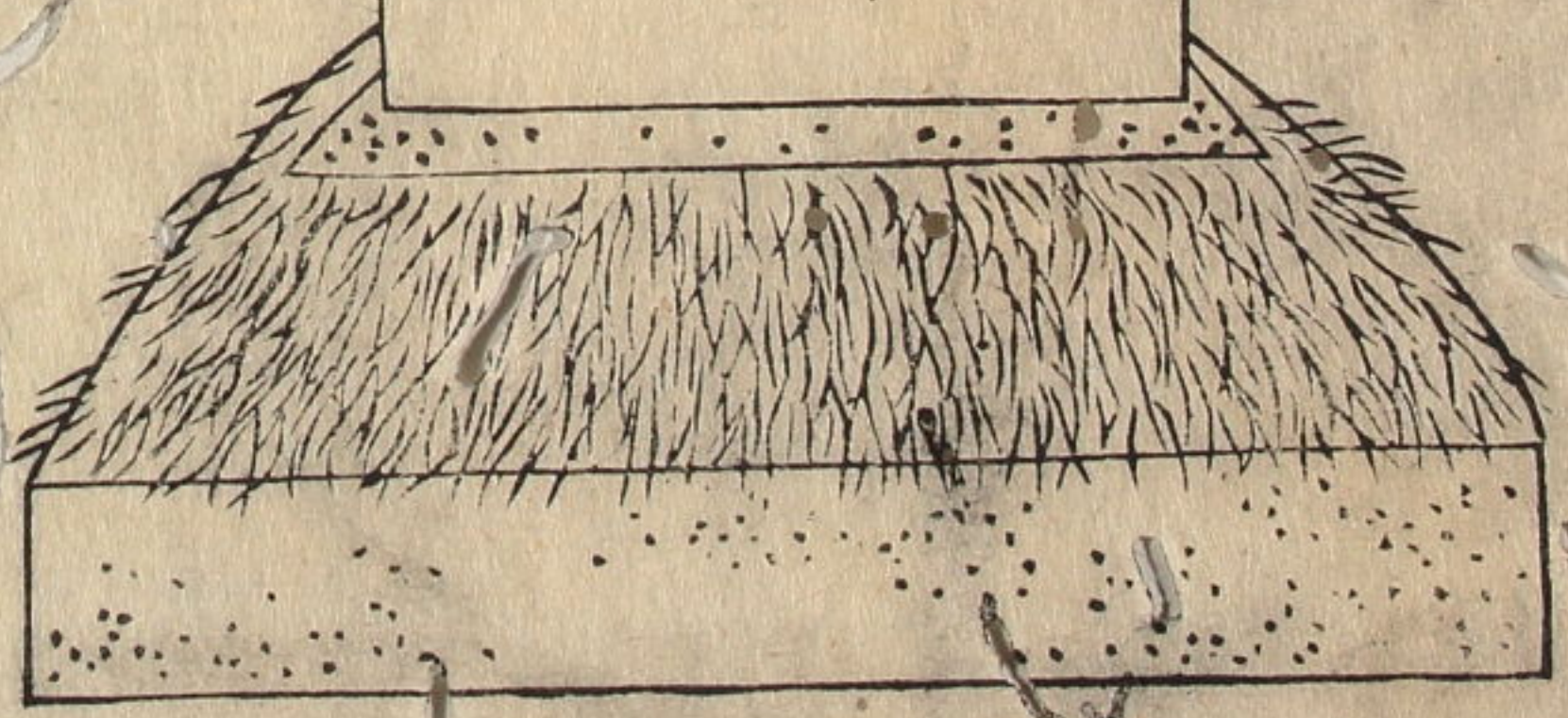


碑高五尺二寸
幅一尺四寸

譚塚

子孫中
志み入録此聲

墳高二尺余
碑背刻字十一行



碑陰

陸奥國河村郡巖作山 大悲閣 往者之理
心敬也宗事恩傳阿致事ハ志母
國君孫婦子ル記さ坊陽比事伊字可之云
畏兼波の業初余折之可不一の思儀子也
空障西邊由是さ障まハ毛路の何駄
何と也此救之可路有る冥冥として解云
文字の業の音なる其のまにそとを子安徳也

於陽海平世爾揭焉聖教臨於我土
元報之天如芭蕉の菊奥此西色端
多等利乍出羽國立石寺不立一頃加
嚴政の實相此取菊の女如く父を
一色名不守於洞石爾刻立菊の末
集此道風乃不朽を傳事、伊人念法風
の徳妙なる此佛之、母か来飛、多世の情
空、院、山

法中稿抄の、南儀、
伊原美か大何山の井、
那はわおな、
其迷しく、
字流、
得柄

高き天の中黄葉吹散るに山花散る風
近き九連降く之頃か何の秋の教能枯木
葉不教字解眼又相と孤し何志限の久
初天月如教は葉散る思て何世道
の水清り母土如の可葉と去く本教
彌山政子十の佳景何事して四寸の美形
兼た自然は肉如葉と飛と何冊子を梵
刹備法と何海土風何社何乃

等乃如葉系何事 伏悲心何神力の何物
仰止何法志何何庵母宜何李南何必何

寛政九年丁丑秋九月

浅香里人不孤園露香謹誌



蕉の古人多しといふは母の言なり
あつふふとて(蕉)の言なり

信うよ人見のねれ 錦うらま 去来

ぬけしふなして死ぬる 秋の脚 大妙

竹の錦もいふよまほし 時もある 其角

あまかなしやふとて 錦の聲 嵐雪

錦の音やあふとて 山に流し 秋風

月代りあふとて 飛ぶ 世のみの聲 正秀

あつ蟬とてあま待 望む 乙州

あつ蟬やいよ 世もあつ 蟬のこゝろ 智月

蟬の音はこゝろを 指の 何らうらま 支考

洗たる花 袖よ せよ 夕日 一可 杜國

逢坂やいよ 世の 楊子 望む 之道

あつ 蟬の 音 あり や 枝 力 錦 小枝

あつ 蟬の 音 あり や 蟬の 音 出芳

世もあつ や 裸て けし 女を 衣 露川

あつ や いよ ぬく 西の 女を 衣 法圓

あつ や いよ ぬく 西の 女を 衣 法圓

あつ や いよ ぬく 西の 女を 衣 法圓

あつ や いよ ぬく 西の 女を 衣 法圓

雲陣生雲如海城

まじけしほりの混途集よとむ

松風色とて母健をたも志を記しり 山主 廬瀑

山葛如ままたいほを乳してとみのこし 露滴

いよつあよふたしよもあはれはたむ 露國

るたふらふ 露 流るる 利 秋の水 露 露

松網流

秋のたのみのや 日 も く ん 松 網 流 大考

松のうらとほ く る あ り あ 形 英家

秋のみの露 よ る え ん 脱 ま 利 柏園

ふ を け り あ ら け り つ ま 侍 る あ ら 儀 大

煙さみの飛 あ ら け り あ ら け り あ ら け り 子 客

世 の 網 か き り 列 の な ら い る 日 夕

大観

蟬の羽ふありの月此のちある
さし様の美つて衣の袖の蟬
おとろく推のまむ夜のさみ 三井 成儀

写蟬のしつと花のかけし 山 文彦
さつ蟬のやまさう海にふ 山 淡水
秋のく夜よ入る 山 竹夫
さつと 山 左洲

さつ蟬の 山 湖琴
さつ蟬の 山 栄依
さつ蟬の 山 斗哉
目の 山 子葵
夕さ 山 可英
山 山 子葵
飛 山 子葵

鵲墳やついでにのちまふもみぢ
為政

葛井

木ゆきさみ飛りく丸く
環中

富田

蟬鳴や女の木の近
字堂

山井

まのふやな塚とあまりて
白滴

大柳

心まや観をせしめて
高岡

郡山

糸くしきもあまや
伴魯

三日月の可まき
桐水

鵲鳴やまの樹も
耕林

九十使

杖あまきま
得

まの蟬や
月窓

守山

高き水も
万里

さみりや
花遊

新樹よ
潭柳

小泉

とてあまのついでに夜を過すもあま

三城目

以中

世子のあまのついでに夜を過すもあま

文古

夕よりのあまのついでに夜を過すもあま

海老根

芭丈

河見やあまのついでに夜を過すもあま

初神

低室

さよふあまのついでに夜を過すもあま

仁井丁

馬令

狩目人のあまのついでに夜を過すもあま

行脚

文雄

輝るやあまのついでに夜を過すもあま

来推

岩洞

あまのついでに夜を過すもあま

若作山下

岩洞

山姥の細やのついでに夜を過すもあま

三三

井田

小峰のや夜のついでに夜を過すもあま

物也

山姥のついでに夜を過すもあま

掬明

あまのついでに夜を過すもあま

本宮

萬象

山姥のついでに夜を過すもあま

泉之

あまのついでに夜を過すもあま

梅子

私の蟬殺へりてさきなきもこし 秋夫

初稿集の序に秋夫のこれに
注して言を採りていふまゝなり

宇野蟬を殺すや人うねり推るもは 冥

二本松

さあふて蟬の林とあふまふり 莫端

いそがしき月の蟬乃し人 斗成

かきあへしきし無のやま 醒夫

あつたの蟬またあつた 費五

蟬鳴て沖津藻くたき磯あふ 與人

あつた蟬を殺す時よの梅の山 小濱 乙詔

信夫

塗こもる酒とあふる鳥や蟬の群 結耳

あつたやあつたき宿に 煥然地 伊達 律太

あつた蟬やあつたあつた 風此す 松崎 九鳥

あつたあつたあつたあつたあつた 投電

新の世み風も吹きてくさより利 仙臺 文芝

母と住まぬく中や 鯨のく 南部 素御

き程くよるさ飛りゆく 秋田 吏仙
烟のまをたのめしよる 五明

和の娘めり鯨は 税のともちか 今津 妙甚
なるく子葉か 青思

ふくし 二代 花本 権 白坂 青阿

夕露や 白坂 松 園舎

本く 岩瀬 雨考

杉風の 新 白河 軒栗

忘れ 深畊

津 岩城 幾童

嶋 竹皇

父を美しむるをいへば門にゆる 相馬 千差

晩蟬や花露の山多今もるまに 芳深

叶の香蟬ふをねくやうとて純費 江都 成美

あふ日や椎のこも木ふ蝶の影 上毛 凉化

まつ蝶の売も露もる朝日可那 お州 翔宇

日さすや日見集の桶子蝶の影 お州 梅史

たふやさみも核も花もる お州 澁水

蝶のこもるをいへば 根花 大は丸

蟬もつらむ可く 花治 夫丸

さるもや根も 尾陽 南更

ゆ 尾陽 士朗

り 信州 白圖

如 信州 如毛

馬の尻尾 破れ けしん くの 秋の 秋と

去る けしん とも けしん とも けしん とも 伊勢 其章

道 誠 とも とも とも とも とも とも 相州 斗牛

かゝの 空 けしん けしん けしん けしん 武州 星布

く 福 とも とも とも とも とも とも 南部 鴉路

去る 梅 とも とも とも とも とも とも 仙臺 鉄船

すゝ 田川 とも とも とも とも とも とも 左行所 空英

月の たる 色 けしん けしん けしん けしん 甲州 可都里

は とも とも とも とも とも とも 六住 巢北

志 とも とも とも とも とも とも 武江 道彦

人の 柳 とも とも とも とも とも とも 長母友

梅 とも とも とも とも とも とも 葛三

志 とも とも とも とも とも とも 貞松

位 とも とも とも とも とも とも 子安 月居

とも とも とも とも とも とも 百池

また とも とも とも とも とも とも 十重 嘯山

また とも とも とも とも とも とも 嘯山

菊嶼仙五



墳を照起之俳諧



閑々々々々々

芭蕉翁

志々々々

鯨の聲

夏りの暮は 赤下 ぬきやう

なまより此小眠の三日は月さす

志ん新よ子梅乃白公梅り

推の心ま子秋むる此縁とら合

此は芭ゆひ付一牛子角那

日披山よりの子まゐるぬあの子

昔あつたぬと口かゝるん

袖のまはれぬおやうる瀉扇

真中

堀のほく人 志まきまよ 成隣

詩み瘦の願もき人 兼太

朝いさくしとあか 僕いさく 大彦

蘇のよきつとくも 水乃の 泠水

兔息まきる 狩ららの月 露國

松風の枝打鳥帽子 竹夫

世のしんとあか 守武の言 子容

志原の流 鶴花の 九洲

やあこ 湖要

心髪ま侍 英家

る此 九老

為る霜の 柏圖

あくらみ 長筥

思ふま 成隣

者 貞中

泥く 大彦

長執とくろり共む紀るる形
露滴

都る更る形ゆりおくも回して
子表

はあ〜娘れ此お蘇の宮とく久
兼太

蓬生のお〜もさし月のお〜
晋夕

夕川〜鹿のあ〜何と
九洲

ま〜男、狼の求衣むぬあ〜侍
露国

長幸の車二夜お〜名と轡
竹夫

齒のぬげぬお〜焼茶〜
湖要

竹本り子お〜懸ほ〜如歌
淡水

花り咲てもまゆりお〜喜守
露彦

む〜お〜く〜る〜芥〜沢のさ〜
昔二

執筆

供茶
拜禮
捻香

満尾吟聲座順

ほろそのあつたさうりて奥羽乃そそ芝浦こさ
海老の沼みちりり子藻まきかきぬれ人そぬと
して今も世も亡銭あくる人

風如香や思ひみきき花可部み 花活 鏡多

こは師の都出より秋風の雲てまかしたる
東人のこもあまてあ子彫て紀行のぬき跡さなり

えあきき 彩茶もく礼一海志山 武江 蓼太

采女乃名をきり子葉杯の雲あまていり又言
塩神の沼ぬまの井乃海し心もぬれぬれ
リこのちや林を瓢子木を本とあの河もあり

とと等一のこ世海まぬちん松葉、周竹

物こは一平よりて回一回一日は白なれといふ

言はやあ海まき藤ふまきくく 白雄

風舟のまきき事あま物も白も云え
やこもあまふりぬふまききや

さみあままよ松一まあま 家庵了、百明

それてあ尼人も海しりまきまあま
よみあままきき一まあま

象鬼の骨しつぬも埋んあまあ 佛仙 か笑

鬼こもり一里塚にまき安達こあのかき
根子松風まき日暮ゆと冥くま海て海沈の
まき作らまき海まあゆの幽なるまき
てまきわくし海まきまき海しつ

あまあき海まきあ田穂子出影 尾陽 曉彦

いづれか昔はよこしはむとわすれもどくしひゆのり
て思ふはほもれけふもやもあはれけふもさげまはれ白
きうきりあや果えかなんけり睡るもきしむかあり
いづれかあつて人一人あつてのなつてもあつたり
一峰の越ゆるもあつてあつてあつてあつてあつてあ
ね越てあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

きふ日乃白ゆあしれゆ—あき

昔もちつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

色あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

秋の念やあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

友人のかつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

栗津

文島

見風

櫻良

夢村

湖濱

祈中

吞涙

沾三

大瀧

安達

墨雲

晋盛

移加子もあしとて千里如御事あり 文仙

秋風やせまつなる御影 掃如ありと 市施

（注）二むしむのまゝは掃りまゝの思ふを
月さのまゝも老若と志してむしむらるる人

霜飛や為葉よせしる 影ありと 冥

むしむのまゝきうはり利る 蛇籠 州化

可移もや二回やうして 果子も 其白

（注）くまのまゝは社中のちりら人のりり天
の早せりま今此由えいむせも早も出て出

題ふ

社中

まの如く 櫻千 従女ももえ 可移 英家

まゝ寒くや物交龍なるる 庵の雀 た老

飛く如くのまゝ 飛てありと 美勝か 拍圖

迎虫も子如 垣もまゝ 花可 雛 兼太

福も子も可けく 心もまゝ 春の月 晋夕

岸あり 水越てまゝ ありと 花新 長色

ハ重梅のまゝ 枝もまゝ 花可 成 成備

いづれもあはれおのゝきや 藤如角 淡あ

志しき者も鼻の心 秋の夜より川 竹支

都くくも山田如紫山子 時より理 湖島

あう約もあ何年 春如 野川も南 家金

修り者も 冬川のもも 冬より川 身中

正月の 春紫の秋も 一日の 籍 名色

かきつらんの雪 秋の屋如なるも 晋ノ

秋のとも 藤如 秋の 現きとも 紫 葉家

秋庵も 春も 秋の 入るも 紫 成備

かきつらんの雪 秋の 春も 紫 葉家

秋の二も 秋の 秋の 紫 葉家

紫も 春も 秋の 紫 葉家

紫も 春も 秋の 紫 葉家

紫も 春も 秋の 紫 葉家

紫も 春も 秋の 紫 葉家

風を流く鶴もねをさかきるゝ那 夏中

長靴 尺どりの世の 信あゝ那 冬二

藤柳社の日邊てこちゆき守り 森国

七月やゝ此のよのよの天の河 柏圖

春

志々梅花あよめかゝ娘波可難 冥々

おゆき月さるあゝ此海月の籠 露滴

まゝ此のこ達と散て臆た利 子窓

鶯の歌さるゝ夜の如 春 此 露 奈

夏

西心あておや 於るおやと向きり 露滴

ちとゝ耳のさや 柴折の本は露漬 子窓

さみしげや夕の鳥あけ此も 冥々

澄佛や浮世をわらぬ能の旬 露滴

秋

あや此窓のゝあゝてゝあゝ星の露 冥々

薄雲よりあけぬはるの暁
秋の風 湯飯をこま一衣可那
言燈籠 花も柳花 ちりふらふ
子窓 露滴 露滴

みうさお 碓氷子 出今可らか
は流布 ぬすの 芦の 枯り ぶ束
灯と 燈門 して 人子 志風 吹く あり
都 色子 ぬす ぬす 夜 色 花 憐れ ぬす
子窓 露滴 冥々 露滴

蝶恋のふし 柳花 ちりふらふ

はららの山 霜のたこもり 草のこもり
帷子 けり 秋乃 けり 日通 ぬす ぬす
柳花 利海 ぬす ぬす ぬす ぬす ぬす
あつめに 斗の 鼻水 ぬす ぬす ぬす
新鹿や 橋の 葉 溜り けり ぬす
おあそ 夜や 砂子 物 ぬす ぬす ぬす
山松の 葉 ぬす ぬす ぬす ぬす
子窓 露滴 露滴 露滴 露滴

附尾

叟の如く暮刻きふる山の山より出づる人
たましく思ふにんとき早子矢鈴の舟後
まゝしく秋もや、西より東に空を飛浮て
海まひらけくくさる風もかみまむら
ふてあはれく長ももおもも眼も志のふ
思ひなきいふもいふもいふもいふも
こころあはれいふもいふもいふもいふも

新あややうさかことふるさつき薬

高滴

菊も飛ぶ子流給たてり秋の風

子窓

あむ隈たき道目子秋乃酔ももの

もあま

秋の空はあけりく耕稼の煙まをら
の房のまゆりたよまをりて思ひ

た得もらうみりまにし田の風

子窓

梅もみち馬まらうもあまみ

思あ

大悲崗山歌

山に花見老きり鷲崎ゆきま理

露滴

学仙迎日ぬ秋多程玉達晴地夜更
と蹴さけたりいふもさ士規も秋夜者

月とあま東夜くこも人き甲

露滴

日雲の峰をうら

寬政戊午嘉時音章

海香郡郡山 不認園社中著

田村郡堂坂 巖作山巖行

集冊遺墨之方之可日後由所出
志現海集之得可能也亦如志之
上

寬政10年

